スマッシュブラザーズ　光と闇と伝説の英雄　キノコ王国編

赤い小説家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スマッシュブラザーズ　光と闇と伝説の英雄　キノコ王国編

【Ｎコード】
Ｎ３０６１Ｗ

【作者名】
赤い小説家

【あらすじ】
スマッシュブラザーズの冒険物語。ある日、普通に生活をしていた主人公、マリオは、ある人との出会いをきっかけに伝説の英雄を目指す旅に出る。
旅の途中に待ち受けるのはさまざまな試練、果たして、マリオは試練を乗り越え伝説の英雄になることができるのか？
「さあ、伝説の英雄を目指す旅へ、Ｌｅｔ，ｓ　ａｎｄ　ｇｏ！」

プロローグ　物語の始まり（前書き）

皆さん、こんにちは！赤い小説家です！頑張って小説のプロローグを書きました！よろしければ読んで見てくださいね！

プロローグ　物語の始まり

ここは、神により創られた世界、フィールドアース。ここには、神により創られた人類、フィギュアが暮らしている。

彼らは、神により創られ、それぞれに記憶や身分、そして、特徴を与えられた善の心を持つライトフィギュアと、自然と創られた悪の心を持つダークフィギュアがおり、それぞれが自由に暮らしていた。

しかし、ダークフィギュアの中には、やがてフィールドアースを我が物にしようとする者が現れる可能性があるため、神は対策を考えた。

だが、いくらライトフィギュアを創る神も、その者に対抗できるライトフィギュアを創ることは難しかった。

そこで、神は自らが考えた試練を乗り越えた者にあるものを渡すことを考えた。

それは、伝説の英雄の心である。

ジリリリリ……。

リン！

この物語は、

「ふああ…。もう朝か…。」

一人の男とその仲間たちの

シャッ！

「……！いい天気だなぁ！」

伝説の英雄にまつわる物語である。

「さて！今日も頑張るぞ！」

彼の名はマリオ。後に伝説の英雄を目指す者である。

プロローグ　物語の始まり（後書き）

皆さん、今回の小説のプロローグどうでしたか？よろしければ、感想をお願いします！

第1話　キノコ王国のスーパースター　マリオ（前書き）

マリオの冒険小説の第1幕！いよいよ始まります！楽しんでもらえるかどうかわかりませんが、よろしければ見てください！

第1話　キノコ王国のスーパースター　マリオ

ここは自然が豊かな不思議な国。キノコ王国。この国は顔がキノコのような形をしているキノコ族がたくさん暮らしているキノコタウンを中心に、人間の姫が治めている。

そして、ここはそのキノコタウンから少し離れた場所にあるひとつの家。ここには、ある二人の人間の兄弟が暮らしていた。

「ルイージー！朝だよー！」

と言いながら、朝食を作っているのは、兄のマリオ。Mの文字が書かれた赤い帽子と赤い服、青いオーバーオールに団子鼻の下に生えている立派な髭が特徴的だ。ついでに言うと、少し太っているのも特徴的だ。彼は見たところ普通の人間に見えるが、優れた運動能力や、強い正義感と勇気の持ち主である。そして、彼はそれらを活かし、キノコ王国を初め、さまざまな国の平和を救ったキノコ王国のスーパースターとなった。

「う～ん…。おはよう、にいさん…。」

と言いながら、眠そうに二階から下りてきたのは、弟のルイージ。青いオーバーオールに団子鼻にその下に生えている髭とマリオに似た格好や特徴を持っているが、マリオと違うところはLの文字が書かれた緑の帽子と緑の服を身に着けている。他に違うところは、マリオより体型が細く、身長が高いところだ。彼は、マリオに負けない運動能力を持っているが、勇気がなく、臆病なせいか、マリオより有名ではない。

マリオとルイージは、マリオブラザーズというコンビ名で、一般の人々を初め、王族にもその名が知られている世界的な有名人だ。

「眠そうだね。もうすぐご飯ができるから、顔を洗って待ってて。」

「うん…。わかった…。」

そして、ルイージは顔を洗いに洗面台へ行った。

マリオが朝食を作り終えるまで少し時間がかかるため、マリオの

家を解説しよう。マリオの家は、キノコタウン側にある入り口から入ると、居間がある。その左隣のドアの先には、風呂とトイレと洗面台が別々にある。そして、入り口から入ってまっすぐに廊下を進むとキッチンがある。ちなみに、そのキッチンの左隣にはさまざまな道具がある道具部屋になっている。そして、その廊下の途中には…

「ルイージー。ご飯できたよー。」

おっと、マリオが朝食を作り終えた。解説の続きはまた次の機会に。

そして、マリオは二人分のトーストと目玉焼きを居間のテーブルに運び、運び終えると椅子に座った。ルイージは、すでに椅子に座っていた。そして、二人は朝食を食べた。

「ルイージ、今日はピーチ城に行くよ。ピーチ姫がケーキを焼いて待ってるぞ。」

「えっ！？ピーチ姫が！？うん、わかった！じゃ、早くご飯食べて行こうよ！」

ピーチ城に行く。姫に会う。姫の焼いたケーキを食べるという三つの喜びが重なって、先ほどの眠気が嘘のように消えて元気になったルイージ。それを見て微笑むマリオ。

ピーチ姫とは、このキノコ王国を治める、美しく民思いの心優しい人間の姫。金髪の長髪とピンクのドレスが印象的である。マリオブラザーズとは幼馴染みでもあり、よく頼りにしている存在である。

そして、二人は朝食を食べ、歯磨きと顔洗いをして、ピーチ城へ出かけた。

マリオの家からピーチ城があるキノコタウンまでの距離は、歩いて五分しかかからないほどである。その途中には穏やかな草原しかなく、特に何もない。

マリオブラザーズは五分もたたずにキノコタウンを通り、ピーチ

城の前の大きな門にたどり着いた。
　マリオブラザーズが急いでいるため、キノコタウンについては解説できないが、ピーチ城のことなら少しは解説できる。キノコタウンにある大きな塀と門、その先には、大きな城ピーチ城がある。ピーチ城の周囲はきれいに整備されている芝生が生えており、入り口付近には元気に咲いている花々がある長方形の花壇と、大きな噴水がある。ちなみに、ピーチ城の入り口の上の壁には、顔のパーツがないピーチ姫が祈っている絵が飾ってある。ピーチ城の中については別の機会にしよう。
「こんにちはー！マリオブラザーズでーす！遊びに来ましたー！」
　マリオが大きな門の前で挨拶をすると、慌てた老人の声が聞こえた。
「おおっ！！マリオ殿！！今、大変なことが起こったのじゃ！！すぐに入ってくだされ！！」
　マリオブラザーズは、「何があったんだろう…？」と思いつつも、ゆっくりと開いた門を通った。すると、その先でキノコ族のお爺さんが片方がキノコのような形をした細い杖を持ちながら、顔にたくさんの冷や汗をたらしながら慌てていた。
「何を慌てているんですか？キノじい。」
　マリオは、キノじいと言う慌てている老人に声をかけた。
　キノじいは、ピーチ姫のそばに仕えるキノコ族のお爺さんで、頭に茶色い水玉模様があり、白く大きな髭をしている。いつも紫色のタキシードのような服を着て、杖に寄りかかって生活しているが、一大事になると杖に寄りかからず普通に慌てたりしている。今はまさにそんな状態だ。
「マリオ殿！姫が…、姫がさらわれてしまったのじゃ！！！」
「！！？ええ！！？さ…さらわれた！！？」
　キノじいの言葉にマリオは驚いた後、真剣な目つきに変わった。
「今朝、わしの元にこんな手紙が届いて…。そして、それを少し読んだ後、姫様の部屋に行ったときには…。」

と、キノじいは一通の手紙をマリオに差し出し、ピーチ姫がさらわれたときの様子を泣きながら話した。マリオはその手紙を受け取り、早速読んだ。

「『ワガハイの宿敵マリオ　ピーチ姫は昨夜の内に頂いた。返して欲しければおまえ一人でワガハイの城に来い。　かっこいい大魔王クッパ』…くそっ！またクッパの仕業か！！」

マリオは手紙を読み終えると、その手紙を手で握り締めながら怒った。

クッパとはキノコ王国を支配しようとしているカメ族の大魔王で、鬼のような顔、鋭い爪、巨大な体、とげが生えた甲羅が特徴である。彼はピーチ姫のことがものすごく大好きで、いつも無理やりにでもさらおうとする。しかし、そのたびにマリオがピーチ姫を助け、失敗に終わっている。その回数は、数え切れないほどである。

「マリオ殿！！お願いですじゃ！！ピーチ姫を助けてくだされ！！」

キノじいは、泣きながらマリオにピーチ姫の救出を頼んだ。それに対しマリオは、

「わかりました！僕に任せてください！」

一度うなずいてからこう引き受けた。

マリオは、困っている人を見ると放っておけない優しい心の持ち主である。このぐらいの頼みは快く引き受けてくれる。

「それじゃあ、早速行って来ます！キノじい、安心してください。ピーチ姫は必ず僕が助けます！」

「ありがとうございます！マリオ殿！」

マリオの言葉に希望が見えたかのように喜ぶキノじい。

「ルイージ。悪いけど、家に帰って留守番をしてて。」

「うん、わかったよ！兄さん、気をつけてね！」

「それじゃあ、行って来ます！」

「いってらっしゃーい！」

「マリオ殿ー！！頼みましたぞー！！」

こうして、マリオはルイージとキノじいに見送られながら、ピー

チ姫を助けるためにクッパ城へ向かうのであった。しかし、これはマリオの長い冒険の始まりに過ぎない。彼は、そのことをまだ知らない。
「どんな困難があっても、困っている人たちを必ず助けて見せる！それが、僕の正義だから！」

「ところで…。ルイージ殿？」
「はい？なんですか？キノじい。」
すっかり泣き止んだキノじいが改まって、ルイージにある疑問をぶつけた。
「……そなたはいつからそこにいたのですかな？」
「……え？」
二人しかいないピーチ城の庭に小さく寂しい風が吹いた。

第1話　キノコ王国のスーパースター　マリオ（後書き）

いかがでしたか？マリオはこの後どうなってしまうのでしょうか？次回もお楽しみに！
できれば、感想をお聞かせください！

第2話　クッパ城を目指せ！（前書き）

スマブラ冒険小説第2話！楽しんでいただければ光栄です！

第2話　クッパ城を目指せ！

キノコタウンからキノコ平野を通り、クッパ城へ向かうマリオ。
キノコ平野はキノコタウンとクッパ城の間にある広い平野。ほとんどが草原だが、道端にキノコが時々生えていることがある。
「早くピーチ姫を助けなきゃ！」
「そう簡単に助けられるかな？」
急ぐマリオの前に敵が現れた。現れたのは、茶色く、キノコのような形をしている生物。数は三体。
「！クリボー！」
マリオは敵の名前を言った。
クリボーとは、元はキノコ族だったが、かつて、クッパがキノコ族を襲撃したときにキノコ族を裏切り、現在はクッパが率いるクッパ軍団に所属している。数は何体もいる。
「そう、俺たちはクッパ軍団の見習い三人組！」
「俺たちはここで、マリオを倒す！」
「そして、クッパ様の護衛兵になる！」
三体のクリボーは自分たちの決め台詞を言ったが…。
「…あの…。僕、急いでいるから！それじゃ！」
急いでいたあまり、マリオはクリボーたちが台詞を言い終えた後、クッパ城へ向かった。クリボーたちはずっこけた。しかし…、
「こら～！！無視するな！！」
一体のクリボーがマリオを呼び止めた。すると、マリオはクリボーたちの方に振り向き、一言言った。
「無視するなって言われても…。その台詞何度も聞かせれてるし。それに、僕は本当に急いでいるんだ！だから、君たちに構ってる暇はないんだ！じゃ！」
と言って、マリオは再びクッパ城へ行こうとした。クリボーたちはしばらくその場で固まっていたが、これでクリボーたちが黙って

いるわけがない。
「…だから…、無視するなー！！」
怒ったクリボーたちが、同時にマリオに体当たりをした。
（…しつこいなぁ。…しょうがない！）
襲い掛かるクリボーたちを見たマリオは、相手をすることにした。
「はっ！！」
ビシッ！
マリオは、一体目のクリボーに左パンチを与えた。
「やっ！！」
バキッ！！
続いて、二体目のクリボーに右パンチ。
「とりゃあ！！」
ドコッ！！
そして、三体目のクリボーに左キックをお見舞いした。
三体のクリボーは、マリオのよくある攻撃で気絶してしまった。
「ふう…。さて、行くか！」
と、マリオが気を改まってクッパ城へ向かおうとすると…、
「待て待てー！！よくぞ僕の部下をを倒したな！！」
マリオの目の前に、一体の敵が現れた。見てみると、緑色の甲羅を着たカメだ。
「…ノコノコ…。」
マリオは、ちょっぴり呆れたように敵の名前を言った。
ノコノコとは、クッパの手下のカメ族。クリボーと同じく、数はたくさんいる。
「そう、僕はさっき貴様が倒した三体のクリボーのリーダー！！」
「僕はここでマリオを倒す。そしてクッパの護衛兵となる？」
マリオは、ノコノコが言おうとした言葉を予想して、呆れながら言った。ノコノコはずっこけた。
「お前！！僕の決め台詞を取るな！！」
「知らないよ！君の決め台詞が何かって！」

「それに、クッパじゃない！！クッパ様だ！！」
「そんなことどうでもいいよ！」
二人…ではなく、一人と一体の短い言い争いが終わると、ノコノコは戦闘体勢をとった。
「まあいい！マリオ！この一発で、くたばってしまえ！」
そう言うと、ノコノコは甲羅の中に潜り、回転しながらマリオに向けて体当たりをした。
「よし！そこまで言うなら相手になってやる！」
マリオはそう言うと、ある技を使うような構えをとった。左足を前に右足を後ろに構えて力を入れ、左手を握って後ろに、右手を丸い物をを持つようにして前に構えた。
マリオは、右手に精神を集中した。すると、右手から火の玉が現れた！そして、左手を前に、火の玉を持った右手を後ろに動かし、
「ファイアボール！！」
そう言ったとたん、左手を後ろに引き、右手の火の玉、ファイアボールをノコノコに向けて発射した！
ゴウ！！
「ぐあーー！！」
ノコノコはファイアボールに当たり、小さな炎に巻き込まれ、気絶した。
「…さてと…。」
マリオが今度こそとクッパ城へ向かおうとすると…。
「待て待て待てー！！！今度は俺たちが相手だー！！！」
今度は、クリボー五体とノコノコ六体の軍団が現れた。
マリオはそれを見て思いっきりずっこけた。
「俺たちは…！」
「もういいよ！！相手になるから！！」
軍団は全員で決め台詞を言おうとすると、マリオはそれを止めるかのように、すぐに顔を上げて突っ込んだ。
「それじゃあ！早速いくよ！」

マリオは気を取り直し、戦う気を出しながらそう言うと、一体のノコノコを踏みつけた。
「うわっ！」
すると、そのノコノコは甲羅の中に入った。
「今だ！いっけー！！」
マリオはその甲羅を掴み、ボウリングのピンのように並んでいる敵たちに向けて投げた！
バッコーン！！！
「あ～～れ～～！！！」
「やった！！ストライク！！」
宙を舞った敵を見て、マリオはガッツポーズをとった。
「さて、そろそろ行くか！」
そして、今度こそマリオは、クッパ城へ向かった。
「…もう敵は来ないよな…。」

一方、クッパはクッパ城でマリオと自分の部下の様子を見ていた。
クッパ城については次の話で解説しよう。今は彼と囚われたピーチ姫の様子を見てみよう。
「クッパ様…！申し訳ございません…！マリオは相変わらず強いです…！」
「ばか者！！！何をやっているのだ！！！お前たちは一ヶ月便所掃除なのだ！！！」
「そ、そんな～…！！」
クッパは、マリオにやられた部下をモニター越しで叱り、モニターの電源を切った。
「全く！どいつもこいつも！何でワガハイの部下はあんなに早くマリオに負けるのだ！？ワガハイを見習って欲しいものなのだ！」
クッパは独り言を言うとピーチ姫のところへ向かった。

ピーチ姫は今、地下牢に閉じ込められている。
「ピーチちゃん。早くワガハイと一緒にこの城で暮らすのだ。」
「嫌よ！私をピーチ城に帰らせて！」
クッパが一緒に暮らすように言うとピーチ姫はそれを断る。よくあることだ。
「ガハハハハ！！そうはいかんのだ！そこでぼろぼろになったマリオが、ワガハイに引きずられてくるのを待ってろ！そのときに絶対にお前はワガハイに惚れるからな！」
クッパは自信ありげにそう言った。だが、ピーチ姫は、
「そんなことは絶対ないわ！ぼろぼろになるのはあなたよ！」
ピーチ姫はマリオを信じているのか、クッパの言葉を否定する。
「果たしてどうかな？じゃ、三十分後また来るのだ。それまでおとなしくするのだぞ。ガハハハハ……！」
そう言ってクッパは地下牢を後にした。
独りになったピーチ姫は、マリオが助けに来ることを神に祈った。
「神様…。どうか、マリオが無事でいられますように見守ってください…。」

そのころ、キノコ王国とは別の大陸では、一人の男が馬に乗りながら、キノコタウンとは比べ物にはならない町の門の前にいた。そして、男はピーチ城より遥かに大きい城を見上げた。その男は、緑色の服を着ており、背中に剣と盾をを背負っている。
「姫が、私に一体何の用なのだろうか？」
そして、男は馬から降り、
「エポナ、お前はここに残って待っているんだぞ。」
と、馬に話し、町へ続く門を通った。

第2話　クッパ城を目指せ！（後書き）

どうでしたか？よろしければ感想をお願いします！

第3話　クッパ城の仕掛け（前書き）

皆さん長くなりましたが、ようやくできましました！前は納得がいかなかったので、訂正しました！

第3話　クッパ城の仕掛け

「…ついにたどり着いた…。」
マリオは、迫り来るクッパの部下達に邪魔をされつつも、ついにクッパ城にたどり着いた。
クッパ城の外見は、一言で言えば石で作られた大きな城で、その城の周りには深い谷とその下にある深い溶岩が囲んでいる。クッパ城への道は、その谷をまたぐ石の橋一本しかない。ちなみに、クッパ城の屋上には、等身大のクッパの石像がある。
「待っててくださいピーチ姫！必ず助け出します！」
マリオはそう言った後、気を引き締めつつも走りながら橋を渡り、正面の大きな扉からクッパ城の中に入った。

（クッパめ、覚悟しろ！この前ピーチ姫をさらいかけてたときみたいにコテンパンにするからな！）
と、強く考えながら入り口から特に何もない広い玄関をまっすぐ進み、その先の扉を開けたマリオが見たのは、
「…まずは一本道か…。」
人が普通に歩けるほどの細さの一本道とその一本道の先にある扉。その途中には、一本道で立っている人の足元を邪魔するかのように回っている四個の火の玉がつながった棒、ファイアバーが五本、そして、その一本道の真下は暗い底だった。
「この一本道の途中にファイアバーを設置するだけなんて、単純すぎるな？」
マリオはそう言った後、なんとこの状況が怖くないのか、落ちれば暗い底の一本道を普通に歩いた。途中で迫ってくるファイアバーもジャンプで軽々とよけ、簡単に一本道の先の扉にたどり着いた。

「あれ？簡単に通れたぞ？いつもだったらこんなことなかったのに…。」
マリオはそう言いながら次の扉を開けた。どうやら前までクッパ城に行ったときは苦戦していたようだ。

次の部屋でマリオが見たのは、
「これは…！」
たくさんのリフトが一直線に並んで浮かぶ部屋だった。もちろん、そのリフトを越えた先には次の部屋への扉があり、リフトの真下は暗い底である。また、この部屋のリフトにはそのまま動かないものや、入り口から見て前後に動くもの、上下に動くものもある。
「…これまた単純だな…。どういうことだ？」
と、言った後、マリオはリフトへジャンプした。動くリフトもタイミングを見計らってジャンプし、そして、たくさんあったリフトを簡単に渡り、あっという間に次の扉にたどりついた。
「？？？また簡単に通れたぞ？」

「あつっ！！今度は溶岩か…！」
マリオが入った次の部屋は、部屋中に溶岩であふれていた。そのためこの部屋はとても暑く、二分いるのがやっとのぐらいの暑さだ。溶岩の中には、ジャンプをしないと届かないくらいの距離をおいて一直線に並んで突き出ている足場があるが、人が立てるぐらいの面積しかない。また、それらの足場の中には溶岩に沈んだり出たりする足場もあれば、溶岩の中を前後に移動する足場もある。それらの向こうには当たり前のように扉がある。ただ、今までと違うのは比べ物にならないほどの大きい扉だということだ。

「あの扉の向こうにきっとクッパがいるな…。何度もピーチ姫を助けるためにクッパ城へ来たけど、毎回大きな扉の先にはクッパがいたんだ。今回も同じパターンに違いないな。」
マリオがその扉を見てそう確信し、そして、
「…今度こそ何かあるよな…。」
そう言った後、困難な仕掛けが出ることを予想…というより期待しながら溶岩から突き出ている足場へジャンプした。動く足場も難なく渡り、マリオは結局、簡単に次の部屋への扉についた。
「…期待してた僕がバカみたい…。」
と、小さく独り言を言いながら、マリオは額の汗を腕でかき、クッパ城に入ったときの気迫が消えたまま次の扉を開けた。

マリオが少しやる気がなくなりつつも入った次の部屋は、今までとの部屋とは比べもにならないほど広く、目の前に長いレッドカーペットがある。その先には、
「…クッパ…。」
クッパが玉座に座っていた。その姿はとても偉そうだ。マリオがやる気を失いつつクッパの名前を言った後、クッパはその状態で、
「ガハハハハ！！よく来たなマリオ！ここまで来れたことを褒めてやるのだ！」
と、言った。それに対しマリオは、
「……。」
ジト目でクッパを黙ってみていた。クッパはそのことを知らずに玉座から降りてマリオに近づきながら、
「フム！それでこそワガハイの宿命のライバルにふさわしいのだ！」
と、言った。
「…クッパ、ひとつ質問していいか？」
突然、マリオはそう言うと、クッパが、

「？何なのだ？」
と言ったのを確認して質問をした。
「今回のクッパ城の仕掛け、ずいぶんと単純すぎないか？」
ここでクッパからギクッと言う声が小さく出たが、マリオはそのことを知らずに質問を続ける。
「いつもだったら、城の中には敵がうじゃうじゃいて、大砲や爆弾が四方八方から降ってきて、下から溶岩が迫って来るっていう位すごい仕掛けがあったのに。」
マリオの少し心配がこもった質問にクッパは冷や汗をかきつつ少し震えながら答えた。
「いや、そ、それは……、えっと……、…！そうそう！！小手調べと言うやつだ！！お前の力が劣ってないかウォーミングアップ風の仕掛けで待ち構えていたんだ！！！」
「…ふーん…。」
クッパの答えにマリオはジト目で腕を組み半信半疑でクッパを見ながらそう言った。しかし、クッパは頭の中で、
（本当は、仕掛けを作る資金がなかっただけだ…。マリオに負けっぱなしの日々が重なって、それがアルバイト部隊にも響いて失敗ばかりしているからだ…。おまけに部員は全員キノコ平野でマリオに負けちゃったし…。）
と、本当の答えを考えていた。クッパも苦労人…いや、苦労亀だ。
余談だが、そう考えた後マリオに気づかれないように小さい声で
「いかんいかん…。」
と、言っていた。
そして、
「まぁ、答えはわかったからそれはそれでいいとして…。クッパ！ピーチ姫を返してもらおうか！」
マリオは気を改めてクッパに本題を話した。
「ガハハハ！！それはワガハイに勝ってこの鍵を手に入れてからなのだ！！」

同じく、期を改めたクッパは、そう言ってからマリオに牢屋の鍵をみせた。もちろん、この鍵があればピーチ姫を助けることができる。
「よし！勝負だ！」
「ガハハハハ！！！勝つのはワガハイなのだ！！！」
ピーチ姫の運命を決める戦いが、今、始まる！勝つのは、ピーチ姫を助けるためにここまで来たマリオか！それとも、打倒マリオとピーチ姫との同居を目標とするクッパか！
（それにしても…、なんか違和感があるな…。何でだ？…いや、考えてても仕方ない。今は戦いに集中だ！）

一方、ここはキノコ王国とは違う別の地方。この地方のとある国のとある城の謁見の間で、一人の男性が一人の女性と話していた。男性は緑の服を着て、剣と盾を装備しており、女性は、見るからに王女のような格好をして玉座に座っていた。どうやら、本当に王女のようだ。
そして、男性は王女に話しかけた。
「姫様、私に何か御用でしょうか？」
「はい。突然で申し訳ございませんが、お使いをお願いします。」
「お使い？一体どこへ？」
「キノコ王国へ行って欲しいのです。」

第3話　クッパ城の仕掛け（後書き）

皆さん、どうでしたか？これまではちょっと忙しいことがあったので次話投稿が遅れました！次回も頑張ります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3061w/

スマッシュブラザーズ　光と闇と伝説の英雄　キノコ王国編

2011年10月8日03時25分発行